

関西菌類談話会会報

1990年11月 No.8



千葉県に来て

吹春俊光

千葉県の県立博物館準備要員として、京都から千葉県にきてもう4年もたってしまいました。そこで若干ですが千葉県の自然とこのころを紹介したいと思います。

1. やはり驚いた発光きのこ

最初の年の1987年夏、東京湾に浮かぶ島、浮島でアミヒカリタケを採集。最初に沖縄で採ったときは、スライドを見てもらった村上氏に指摘されるまでは、何のきのこか全くわからなかったという因縁のきのこだけに、はげしく興奮。本郷図鑑では和歌山県が北限となっており、新分布。

もうひとつの発光きのこはヤコウタケ。東京大学千葉演習林、清澄山で採集。当館の小笠原調査隊のスライドで見た直後で、これまたはげしく興奮。採集するとき、材についている柄基部の吸盤形を見て、もしかしたらとやや興奮、翌朝ビニールをあけ暗闇で見て、たいへん興奮。通りがかりの、博物館の展示解説嬢を思わず暗闇に連れ込んでしまう。解説員さんも緑青白い光にうっとり。

2. 千葉県では雑木林もちがう

開館していない博物館だから、開館までに集めなければならない標本、写真、音などがあり、開館までの2年間は千葉県内のいろんな山の中を、木を切ったり、展示のための模型の材料採集とか何やかやで連れ回される。県内には谷津(ヤツ)という縄文時代の海進地形がいたるところにあり、水田をはさむ谷津の斜面は一面の雑木林。コナラはまだわかるが、コナラに混じって一面に生えているのがイヌシデ。変でしょう？ もしかしたらとの予感当り、7月初めスミゾメヤマイグチ(2胞子のもの)が群生。関西のきのこ採集ポイントである、アカマツ・コナラ林とはまた違った趣を実感。そのほかよくわからないきのこがたくさん採れます。

3. 京都では珍しい海岸林

千葉は三方を水に囲まれ(東京湾、太平洋、利根川)と称するように、海が近い。街道筋を歩けば、枝振りのよいマツと砂浜(湾内だから泥浜?)、その向こうにはいつも富士山が見えていた、という昔の東京湾は、今となっては企業に売り渡してあるため、ありません。きのこ採りは、太平洋の方にいきます。千葉市内の博物館から車で1時間ほどで九十九里浜。

しかしこども、リゾート開発とかで、自然のマツ林はほとんどなく、かろうじて残ったマツ林や植林の林できのこ採り。それでもショウロ、クマシメジなどがとれます。

開館以前に、波打ち際にマツの林までの相変異を示す、5枚組くらいのパネル用写真の撮影を任せられ、地元の人と銚子から館山の方まで歩き回りましたが、電柱、道路に寸断され、途切れ途切れの写真しか撮れなかったこともあります。いかに自然の海岸林がなくなっているかということを実感。

4. 日本最初の大学演習林、清澄山

千葉県では「きよすみ」といいますと、清澄寺のことです。正しくは「せいしょうじ」。1200年の歴史を誇る寺で日蓮さんが修行をしたというこ

とでも有名。

このお寺を取り囲むように、東京大学の演習林があります。1894年に日本で最初の演習林となりました。広さ約2200ha、うち天然林は1231ha。標高は100-300mで最高は383m。ちなみに京都大学芦生演習林は、1921年開設で広さ4160ha、うち天然林は2000ha。

清澄の林で特徴的なものが、モミ・ツガの天然林です。19世紀末までは、演習林の大半はこの林だったということです。モミ・ツガが上層をつくり、アカガシ・スダジイがその下層をつくります。京都鞍馬の林が大規模になったところを想定して下さい。照葉樹林の上限あたりになると、このように針葉樹と照葉樹が混じり合う林が極相として成立するのだそうです。

キノコ相はやはりベニタケ科を主体にしているようです。変な感じは、チャワンタケの仲間が多そうなこと。林内にオオゴムタケが出続けたり、ノボリリュウの仲間がたくさん出たりします。ウスタケも当然発生し、変わったところでは、ヒメサクラシメジなんかも出ます。

5. 植えたとしても立派な照葉樹林

関西を離れるときに、横山和正先生から「千葉にはマテバシイ林があるじゃないか」と励ましの御言葉。

清澄山から海の方におりると、いかにも照葉樹林という林が海ぎわに広がっています。昔、薪炭林として植えたものだというマテバシイ林です。1989年9月9日の採集リストを見るとオキナクサハツ、カバイロコナテングタケ、シロハツモドキ、シロオニタケ、オオウラベニイロガワリ、ヘビキノコモドキ、ニオイコベニタケ、クリイロイグチなど。どうです？ いいところでしょう。やはり我々がやらなければならないのは、ブナ科の照葉樹林です。

6. 千葉県でよく食べるきのこ

まずハツタケ。季節に海岸林へ行くと、朝暗いうちから、探しています。とにかくハツタケは別格に扱われています。秋になると、イッポンシメジと呼ばれるウラベニホテイシメジ、そしてサクラシメジ。この2種はたくさんとれます。ホウキタケの類も食べているようです。春、シイ林にでるカシタケ(*Russula* sp.)も根強いファンがいます。あと、房州マツタケといわれるバカマツタケ。市場にはでまわりませんが、ひそかに流通しています。県の林試でも特産林産物化に取り組んでいるようです。

7. その後の私

以上で千葉県のことはおわかりになったでしょうか。

地方自治体の博物館で働いているわけですが、これからの日本の自然史と博物館についてときどき考えます。日本の自然史学がいかにお寒い体制のなかにおちいっているか。米国のスミソニアン等がもつ標本や研究環境はこれから日本がつくっていくべき目標となるでしょう。詳しくは、生物科学1990, 42(1): 27-36にスミソニアン協会についての紹介があります。

きのこの出会い

松井英幸

昨年の秋から本会に、入会させていただいた新人です。自己紹介をかねて、きのこのこの出会いについて触れさせていただきます。

小さいころ故郷の広島で、母親に連れられ松茸狩りに行き、母は簡単に見つけるのに、私には松茸を見つけることができず、ネズミナバ（ホウキタケ？）しか採れなかった記憶があります。

その後きのこのことは関わる事はなかったのですが、9年前の秋に、神奈川県立博物館において、神奈川きのこの会の後援できのこの展が催されたとき、当時の上司であり今関六也先生の親戚の水野康次氏と見学に行き、今関先生の案内を受け、新鮮な感動を受けました。

当時、私は自然科学写真協会の会員であり、風景写真を中心に撮影をしていましたが、ちょうどライフワークとなるようなテーマはないかと探しており、もしかしたらという予感があり、入会させて頂き、きのこの写真を撮り始めました。

最初は目につくきのこはすべて珍しく、きのこの形さえしていればよく、片っ端から撮影していました。そのうちに、仲間の人達から、形の良いものがあると声をかけて頂くようになり、写真屋さんと呼ばれるようになりました。そうすると本当に楽しくなり、だんだんとそのきのこらしい状態や特徴にも気を遣えるようになり、きのこの名前も鑑定会が待ちきれず自分で調べたくなってきました。

自分で撮影したきのこの写真のうち、名前のついていないものが、だんだんと増えてくるとますます同定の必要に迫られ、図鑑や写真集を購入手勉強をするようになってきました。しかし実際には、いくら図鑑や写真集を見てもそれだけでは判断できず困ってしまいました。やはり顕微鏡がないとどうしようもなく、今関先生からも顕微鏡の必要性を教わり、知合いから顕微鏡を入手し、孢子などを見るようになりました。しかし、それでも判らないものの方が多く、少しでも多くの現物を見たいと思い、信州きのこの会や、埼玉きのこの同好会にも入会し、日本菌学会にも入会してしまいました。

さらに一属位は自分でもなんとかしたいと思いき、無謀にもホウキタケの仲間に興味を持ってしまいました。ホウキタケ属 (*Ramaria*) で和名のついているのが17種、コーナーのモノグラフで約70

種、これ位ならなんとかなるかなと思ったのが泥沼の始まりで、日本菌学会会員の井口潔氏の協力で海外の文献を集めると、現在の手持ちの資料だけで、300種を越えてしまいました。これではアマチュアには荷が重いと、とりあえず和名のついているのが5種だけのカレエダタケ属 (*Clavulina*) の整理を始めたなら、45種、亜種変種を含めると78にもなりました。カレエダタケとカレエダタケモドキ位は、きちんと同定出来るようにと思い調べると、どちらにも変種がたくさんあり、私のつたない語学力では種概念が判らなくなってしまいました。

しかし、これがきのこの不思議さであり、面白さではないのでしょうか。どうせ泥沼にはいるなら最初に興味を持ったホウキタケ属をと思い、今は、再びホウキタケ属に挑戦し、ハナホウキタケとは何かと悩んでいます。

きのこの写真はポイントはもちろん、ブレのないもの、忠実な色再現をしていることが必要です。そのためにはまず、重たい三脚が必要になります。腐葉土の上でスローシャッターを切っていると、三脚を使ってもカメラが揺れているのが判ることがあります。次に、ストロボも必需品となります。もちろん自然光で、条件の良いときの方がきれいな写真は撮れますが、日曜カメラマンの場合は、条件の悪いときでも撮影しておかなければなりません。いつまたそのきのこの巡り会えるか判らないので、そのときの条件の中での最善の方法を考えるとストロボが必要となることが多くあります。

また、きのこの写真には、芸術的にきれいに撮れているもの、特徴がよく現れているもの、その両方を兼ね備えているものとあります。アマチュアでも珍品や個体の良いものに出会えれば、プロにも撮れない写真が撮れることもあると信じて撮り続けているうちに、学研の図鑑や、アサヒグラフに写真を使ってもらったこともあります。逆に、平凡なきのこでもなかなか形の良いものに巡り会えず、良い写真の撮れていないものもあります。

これからもきのこの写真を撮り続けて行きたいと思えます。例会のときには、重たい三脚とストロボ付きのカメラを持って参加させて頂きますので、よろしくお願い致します。

大山採集会に参加して

北 岸 阿佐子

この原稿を書いている今は秋です。秋の長雨と言うけれど、今年は少し雨の日が多すぎるようで、気分が天気に左右される私にとっては採集に出ようと思ってもなかなか決心がつかない日が続いています。

今年の大山採集会の頃は逆に極端なからから天気で、一滴の雨も降らない日が何日だったか、続いた後でしたね。日本も、雨期と乾期がはっきりしている大陸並になってきたのかな。まあ、そんなからから天気だったので、きのこなんて採れないだろうと半ば諦めながら参加したわけです。集合当日、O君の運転する車で落合インターから北上してきて、雄大な大山を横目に見ながらまず、三ノ沢を下見しました。林の中に入ってもあの菌糸独特の香りがしないし、水の匂いもない、落葉をかき分けてみても奥の方までカサカサしている、というわけで、「これは明日っからどうしよう。」と言いながら、少し捜して回っていたのです。それでも、私が何も見つけられなかった朽木のそばをO君が指さし、「ツエタケがあった。」と言うのを見ると、何もなかったと確かに思っていたはずの地面からツエタケが出ているのではないですか。別の場所でも、H氏が私の足元を指さし、「おっと、コウジタケかな。踏まないように。」なんて呪文をかけると、そこにコウジタケが現れるのです。こういう時、私はみんなして私を魔法にかけているのではないかと思ってしまう、少し年甲斐もなくすねたくなります。それとも私が歩くときのこたちが一斉に逃げてしまうんではないかしらん。

実際、今回の採集会でも初日の横手道こそ、ケシロハツ、チチタケ、アオゾメツチカブリばかり採れ、乳液が出ることと、乾燥に強い^いということには何か関係があるのかなあ等と話題に上っていたほどなのですが、三ノ沢での採集では豊富とはいえないまでも、思ったより多様な収穫があり、半日歩き回って、ほとんどめぼしいきのこに出会えなかった私としては、これも魔法のように感じました。

で、そんな風に採集の下手な私が、のこのこと採集会、特にこの夏の合宿に参加するのは、採集品の鑑定会でいろいろなきのこの名前を知ることができる、ということもさることながら、やはり、少ない収穫でも、よってたかって話題にしてしまおう、ゲリラ的なきのこ談議が楽しいからですし、(この時、お酒が少しあると、なお皆舌がスムー

ズになって楽しいと思うのは私だけかしらん。)さらに、夏の採集会でしか会えない人たちに会えるということが何よりの楽しみになっているからです。

さて、この採集会の計画段階で、チチタケを栃木県辺りではよく食べるという話が出て、それなら、そのおいしいというテンブラを大山採集会の時みんなで見ようということになっていました。あの、少し渋味のある乳を多量に出すチチタケを、渋みを抜かずにテンブラにして食べるとおいしいのだそうです。私も半信半疑で、というよりは、信じていない方が80%という感じでしたが、百聞は一味?にしかず、ということで実行に移すことにしました。幸いにもチチタケは沢山採れたので、(というよりチチタケしか採れなかったという方が近い。)宿の人に言って、テンブラにしてもらいました。本当は厨房が借りられれば、自分たちで調理したかったのですが、厨房に客を入れることは禁じられているようで、「本当に大丈夫ですね、と念を押された上で調理してもらったわけです。宿の立場とすれば、これは止むをえない対応だと思ったのですが、念を入れてくださる余りに、せっかくのテンブラに火が通り過ぎて、チチタケを食べているのか、衣を食べているのかわからなくなってしまったのは残念でした。でも、油で揚げるとあの渋みは飛んでしまうのではないかなという感じはしました。またトライしてみたいものです。

きのこが沢山採れればそれに越したことはないのでしょうか。また、珍品が採れることも、せっかく遠出をして、休みを取ってきているのだからとつい期待してしまいます。でも採れないなら採れないなりに、日頃無視してしまいがちな種類のものや、ありふれた、と思っ^てしまいがちなきのこについて、いろいろな方面から注目でき、話題にすることで興味もわくよい機会だと思っていたいものです…。なんて、珍品も普通種も区別のつかない私は都合よくそんな風に思っています。採集する人はする、木陰できのこ談議にうつつを抜かず人もいる、日頃の疲れを癒すために昼はひたすら昼寝をし、夜になると起き出して雑談に参加する人もいるというような、この緩やかな大人たちの集いという夏の採集会の雰囲気がこのまま続いていくことを、とつい願ってしまう、落ちこぼれ^の独り言でした。

関西菌類談話会第277回例会

大山採集会採集品リスト

採集地：鳥取県大山(横手道沿い・三ノ沢周辺)

採集日：1990年8月5, 6日

採集者：関西菌類談話会会員

主な同定者

長沢栄史, 山本幸憲, 宮内信之助, 服部 力,
森本繁雄, 吉見昭一, 上田俊穂, 柳沢美恵子,
稲葉真由美

変形菌門 MYXOMYCOTA

- 1 *Cribraria microcarpa* アシナガホコリ
- 2 *Lycogala epidendrum* マメホコリ
- 3 *Lycogala exiguum* コマメホコリ
- 4 *Arcyria cinerea* シロウツボホコリ
- 5 *Hemitrichia calyculata* ホソエノケホコリ
- 6 *Craterium minutum* サカヅキホコリ
- 7 *Fuligo septica* ススホコリ
- 8 *Physarum nutans* シロモジホコリ
- 9 *Physarum viride* アオモジホコリ
- 10 *Dydimium iridis* s.l. カタホコリ属の一種
- 11 *Collaria lurida* 和名なし
- 12 *Stemonitis axifera* var. *axifera* サビホコリ
- 13 *Stemonitis axifera* var. *smithii*
サビホコリの変種
- 14 *Stemonitis fusca* var. *rufescens*
ムラサキホコリの変種
- 15 *Stemonitis splendens* ビロードホコリ
- 16 *Stemonitopsis typhina* var. *typhina*
ダテホコリ
- 17 *Stemonitopsis typhina* var. *similis*
ダテホコリの変種

子囊菌門 ASCOMYCOTA

- 18 *Hypocrea* spp. ヒポクレア属の一種 (2種)
- 19 *Cordyceps ferruginosa* サビイロクビオレタケ
- 20 *Cordyceps nutans* ミミカキタケ
- 21 *Isaria japonica* ハナサギタケ
- 22 *Xylaria polymorpha* マメザヤタケ
- 23 *Xylaria* sp. マメザヤタケ属の一種
- 24 *Daldinia* sp. チャコブタケ属の一種
- 25 *Ascoclavulina sakaii* クチキトサカタケ
- 26 *Chlorociboria aeruginascens*
ロクショウグサレキンモド

- 27 *Chlorociboria aeruginosa*
ロクショウグサレキン
 - 28 *Orbilbia* sp. オルビリア属の一種
 - 29 *Mollisia* sp. ヒイロクズチャワソウタケの近縁種
 - 30 *Humaria hemisphaerica* シロスズメノワン
 - 31 *Helvella crispa* ノボリリュウ
 - 32 *Helvella macropus* ナガエノチャワソウタケ
 - 33 *Scutellinia scutellata*
アラゲコベニチャワソウタケ
 - 34 *Dicephalospora* sp.
ディケファロスボラ属の一種
- 担子菌門 BASIDIOMYCOTA
- 35 *Pleurotus pulmonarius* ウスヒラタケ
 - 36 *Laccaria vinaceoavellanea* カレバキツネタケ
 - 37 *Collybia peronata* ワサビカレバタケ
 - 38 *Megacollybia platyphylla* ヒロヒダタケ
 - 39 *Oudemansiella radicata* ツエタケ
 - 40 *Amanita farinosa* ヒメコナカブリツルタケ
 - 41 *Amanita longistriata* タマゴテングタケモドキ
 - 42 *Amanita onusta* 和名なし
 - 43 *Amanita rubrovolvata* ヒメベニテングタケ
 - 44 *Amanita spissacea* ヘビキノコモドキ
 - 45 *Amanita subjunquillea* タマゴタケモドキ
 - 46 *Amanita vaginata* var. *fulva*
カバイロツルタケ
 - 47 *Amanita virosa* ドクツルタケ
 - 48 *Amanita volvata* フクロツルタケ
 - 49 *Am. nita* sp. テングタケ属の一種
 - 50 *Pluteus atricapillus* ウラベニガサ
 - 51 *Lepiota praetervisa* ナカグロヒメカラカサタケ
 - 52 *Coprinus rhizophorus* ホソネヒトヨタケ
 - 53 *Stropharia rugosoannulata* サケツバタケ
 - 54 *Kuehneromyces mutabilis* センボンイチメガサ
 - 55 *Inocybe fastigiata* オオキヌハダトマヤタケ
 - 56 *Inocybe* sp. アセタケ属の一種
 - 57 *Descolea flavoannulata* キショウゲンジ
 - 58 *Crepidotus* sp. チャヒラタケ属の一種
 - 59 *Rhodophyllus rhodopolius* クサウラベニタケ
 - 60 *Paxillus atrotomentosus* ニワタケ
 - 61 *Phylloporus bellus* var. *cyanescens*

- | | | | | |
|----|--------------------------------------|------------------------------|---------------------------------------|---------------|
| | イロガワリキヒダタケ | 96 <i>Polyporus brumalis</i> | オツネンタケモドキ | |
| 62 | <i>Gyropolus cyanescens</i> | アイゾメイグチ | 97 <i>Polyporus varius</i> | キアシグロタケ |
| 63 | <i>Xerocomus chrysenteron</i> | キッコウアワタケ | 98 <i>Polyporus alveolarius</i> | ハチノスタケ |
| 64 | <i>Xerocomus nigromaculatus</i> | クロアザアワタケ | 99 <i>Polyporus arcularius</i> | アミスギタケ |
| 65 | <i>Xerocomus subtomentosus</i> | アワタケ | 100 <i>Microporus vernicipes</i> | ツヤウチワタケ |
| 66 | <i>Boletus sensibilis</i> | ミヤマイロガワリ | 101 <i>Meripilus giganteus</i> | トンビマイタケ |
| 67 | <i>Boletus sp.</i> | イグチ属の一種 | 102 <i>Tyromyces fissilis</i> | シミタケ |
| 68 | <i>Tylopilus vinosobrunneus</i> | ブドウニガイグチ | 103 <i>Oligoporus tephroleucus</i> | オシロイタケ |
| 69 | <i>Leccinum hortonii</i> | シワチャヤマイグチ | 104 <i>Oxyporus populinus</i> | シロサルノコシカケ |
| 70 | <i>Strobilomyces confusus</i> | オニイグチモドキ | 105 <i>Oxyporus ravidus</i> | ザイモクタケ |
| 71 | <i>Strobilomyces strobilaceus</i> | オニイグチ | 106 <i>Piptoporus soloniensis</i> | シロカイメンタケ |
| 72 | <i>Russula chloroides</i> | シロハツの近縁種 | 107 <i>Coltricia cinnamomea</i> | ニッケイタケ |
| 73 | <i>Russula cynoxantha</i> | カワリハツ | 108 <i>Daedalea dickinsii</i> | ホウロクタケ |
| 74 | <i>Russula delicata</i> | シロハツ | 109 <i>Trametes gibbosa</i> | オオチリメンタケ |
| 75 | <i>Russula foetens</i> | クサハツ | 110 <i>Trametes minutissima</i> | サワフタギタケ |
| 76 | <i>Russula laurocerasi</i> | クサハツモドキ | 111 <i>Antrodiella sp.</i> | ニカワオシロイタケ属の一種 |
| 77 | <i>Russula lepida</i> | ヤブレベニタケ | 112 <i>Coriolus versicolor</i> | カワラタケ |
| 78 | <i>Russula senis</i> | オキナクサハツ | 113 <i>Lenzites betulina</i> | カイガラタケ |
| 79 | <i>Russula vetermosa</i> | 和名なし | 114 <i>Trichaptum bifforme</i> | ハカワラタケ |
| 80 | <i>Russula sp.</i> | ベニタケ属の一種 | 115 <i>Skeletocutis nivea</i> | ヒメカタパンタケ |
| 81 | <i>Lactarius glaucescens</i> | アオゾメツチカブリ | 116 <i>Bjerkandera adusta</i> | ヤケイロタケ |
| 82 | <i>Lactarius hygrophoroides</i> | ヒロハチチタケ | 117 <i>Fomes fomentarius</i> | ツリガネタケ |
| 83 | <i>Lactarius piperatus</i> | ツチカブリ | 118 <i>Perenniporia medulla-panis</i> | ウスキアナタケ |
| 84 | <i>Lactarius vellereus</i> | ケシロハツタケ | 119 <i>Ganoderma lispiense</i> | コフキサルノコシカケ |
| 85 | <i>Lactarius volemus</i> | チチタケ | 120 <i>Ganoderma tsunodae</i> | エビタケ |
| 86 | <i>Lactarius sp.</i> | チチタケ属の一種 | 121 <i>Onnia scaura</i> | サジタケ |
| 87 | <i>Schizophyllum commune</i> | スエヒロタケ | 122 <i>Phellinus gilvus</i> | ネンドタケ |
| 88 | <i>Clavicornia pyxidata</i> | フサヒメホウキタケ | 123 <i>Astraeus hygrometricus</i> | ツチグリ |
| 89 | <i>Phanerochaete chrysorhiza</i> | ヒイロハリタケ | 124 <i>Scleroderma sp.</i> | ニセシヨウウロ属の一種 |
| 90 | <i>Mycoacia copelandii</i> | サガリハリタケ | 125 <i>Calostoma japonicum</i> | クチベニタケ |
| 91 | <i>Stereum ostrea</i> | チャウロコタケ | 126 <i>Calostoma sp.</i> | ホオベニタケ |
| 92 | <i>Stereum ochraceo-flavum</i> | ミヤマチャウロコタケ | 127 <i>Crucibulum laeve</i> | ツネノチャダイゴケ |
| 93 | <i>Stccherinum rhois</i> | アラゲニクハリタケ | 128 <i>Lycoperdon hiemale</i> | ヒメホコリタケ |
| 94 | <i>Mycoleptodonoides aitchisonii</i> | ブナハリタケ | 129 <i>Pseudocolus fusiformis</i> | サンコタケの近縁種 |
| 95 | <i>Polyporus badius</i> | アシグロタケ | 130 <i>Protodaedalea hispida</i> | ムカシオオミダレタケ |

以上

ここ3, 4年間に行った採集会の採集品リストは未発表であるが, 前ページの北岸氏の文とタイミングを合せ
る形で, とりあえず本年度の大山採集会での採集品を発表したい。変形菌, 変種, 未知種も含めて131という数
は, やはり少ないのではないだろうか。

なお, 近年の採集会の記録は, 発表の準備をしていると聞く。

大山採集会世話人代表 佐々木久雄

このきのこ食べられますか？

利恵 & Daniel GUEZ

フランスでは、昔から野生のきのこを食用してきました。きのこ狩りは、家族でできるスポーツのようなもので、国民的規模で行なわれています。季節になると、殊に日曜日、人々は森から採ってきたきのこを、近くの薬屋に持っていき、「このきのこ食べられますか？」と調べてもらいます。(実際には薬剤師は mycologist でないかぎり、それほど詳しくは知らない。)

フランス料理には、きのこを使ったものが数百種類もあり、トリフ、ジロル、モリーユ等は、フランス料理を一段と有名なものにしました。

また17世紀には、ジャンピニオン・ド・パリの名でツクリタケの栽培が始まり、現在では、フランスの輸出品目中、六番目の重要なものです。

フランス菌学会(1884年創設の世界で一番古い)と各県ごとにある地方の菌学会は、年間を通じて毎週末、採集会や研究会を行なっています。秋には各地できのこ展があり、また各県持ち回りのコンGRESが年一回開催されます。

このような伝統的ともいえる、きのこに関心の強い環境の下で、最初は私達も、「このきのこ食べられますか？」から入門しました。しかし、きのこの付き合いも10年になると、「これ、ほんとうに食べられるのかな？」といった疑問にかわってきました。そのような疑問は、また多くの人は何らかの形で公表しています。

きのこの研究や化学分析が進むにつれ、少しずつ、毒きのこの毒成分が確認されると共に、食用きのこからみつかるとともに及ぶ化学物質のリストアップが始められてきました。この結果、次の2つの点が注目されます。

1) 食用といわれるほとんどのきのこは、潜在的に作用するたくさんの有害物質を有していることですでに有毒である。

2) 上記のきのこが、外的要因(汚染)で毒性を有する。つまり、きのこには食欲に地中あるいは地上の重金属、汚染物質、放射性物質を吸収、濃縮、貯蔵する性質があるのです。

きのこは、非常に多くの化学物質を生産する有能な工場です。

医薬品製造が目的で始められた Mycotoxines の研究によって、いくつかの物質が癌や他の重大な病気に直接関与していることがわかってきまし

た。そして問題なのは、それらの物質が、いわゆる食用として好まれているきのこに含まれていることなのです。

aflatoxine, sterigmatocystine, rugulosine, ochratoxine, patuline... などはすべて、細胞やDNAに変性をきたす物質です。それらは核酸と結びついて未知の分子を生み、細胞生成過程に変性を生じさせます。また放射線で被曝したように核や染色体に異常を引き起こすのです。一つの物質が同時に抗生物質、突然変異物質、発癌物質であることです。そのいずれにも、抗体を生じさせないことが、バクテリア性の毒性と大きく違う点です。これらの毒性に対する有効な手段は見つかっていません。

以下に食用としてよく知られているきのこの毒性を列記します。

MUTAGENIC POISONS

= 突然変異誘発性物質 =

Boletus edulis, *B. subtomentosus*, *Agaricus cookeanus* [ツクリタケ], *A. silvaticus*, *Macrolepiota rhacodes*, *Lactarius deliciosus*, *Coprinus comatus*, *Armillaria mellea* など。(STERNER, 1982)

CYTOTOXIC-ANTIBIOTIC

= 細胞障害性物質・抗生物質 =

Agaricus campestris (KURASAWA, 1975), *Clitocybe maxima*, *C. nebularis* (ROLAND, 1960), *Flamulina velutipes* [エノキタケ] (KOMATSU, 1963)

CARCINOGENIC

= 発癌性物質 =

Lactarius plumbeus, *L. scrobiculatus*, *L. pergamenus*, *Cortinarius "sanguinei" & "cinnamomei"*, *Clitocybe suaveolens* (ENEMOTO, 1972; HERMAN, 1960), *Agaricus bisporus* [ツクリタケ], *A. silvicola*, *A. silvaticus*, *A. arvensis*, *A. campestris* など。

フランス、東欧諸国、日本などの、きのこの大量生産・消費国は、たとえ自分達に不都合な研究結果であっても、こと人の健康に係わる問題である以上、沈黙を続けることはできないのではないのでしょうか。

「このきのこ食べられますか？」の質問には、十分に慎重でありたいと思うと共に、私達にできる事は、これらの情報を必要とあらば、他の人に伝えることです。(8ページへつづく)

参 考 資 料

- 1) L. GIACOMONI: Champignons Intoxications Pollutions Responsabilités. 1989.
- 2) B. TOTH: Hepatocarcinogenesis by hydrazine mycotoxins of edible mushrooms. 1979.
- 3) W. S. CHILTON: Chemistry and mode of action of mushroom toxins. 1978.
- 4) A. & M. CERUTI: Funghi cancerogeni et anticancerogeni. 1986.
- 5) H. HERMAN: p-methylnitrosaminobenzaldehyde, a metabolic product of *Clitocybe suaveolens*. 1960.
- 6) W.S. CHILTON & C.P. HSU: N-Nitrosamines of *Agaricus silvaticus*. 1975.
- 7) Y. CHAUHAN, D. NAGEL, P. ISSENBERG & B. TOTH: Identification of p. Hydrazinobenzonic Acid in the commercial mushroom *Agaricus bisporus*. 1984.
- 8) R.C. AZEMA: La pollution des champignons par les métaux lourds. 1985.

関西菌類談話会会報投稿案内

1. 投稿は原則として本会会員に限ります。
2. 原稿の採否、掲載の順序は編集委員会の決定にお任せ下さい。
3. 編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めています。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお任せください。
4. 原稿には表題、著者名、本文の他に必要なら引用文献（あるいは参考文献）をあげてください。
5. 別紙に著者名、連絡先、住所、電話番号を書いて添付して下さい。
6. 著者校正是初校だけとし、2日以内に原稿正本とともに速達郵便で返送してください。
7. 掲載された原稿はお返しませんが、図・写真に限り著者校正のときにお返しします。
8. 写真製版料実費は著者の負担とします。
9. 原稿は会報編集委員長宛てにお送りください。

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇ かびやきのこに関する記事、図、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇ 図は黒インクで、少し大きめ（刷り上がりの約1.5倍）にお書きください。（ボールペンは不可です）
- ◇ 原稿の分量は400字づめ原稿用紙4～5枚程度としますが、1枚でも半分でも結構です。
- ◇ 写真の掲載を希望される方は、編集委員長におたずねください。
- ◇ 原稿宛て先

〒612 京都市伏見区深草西出町25-4

関西菌類談話会会報編集委員長

森本 繁雄

TEL. 075-641-3729

編集委員：山中 勝次、井坪 豊明、橋屋 誠、丸西 靖恵、佐々木久雄、（順不同）

表紙よせて

八甲田山のブナ林のみごとなツキヨタケ (*Lampteromyces japonicus*) に感激して、我が家に帰ると、娘はふざけたツキヨタケの絵を描いていました。

こんなとんでもないきのこの大木が、ブナ林に一本くらい混じって生えていてもいいな、と思いませんか。

表紙絵 丸西靖恵 文 丸西一枝

編集後記

今回初めて、採集リストを掲載しました。会員のニーズに応える会報を目指すための一つの試みです。同封しましたアンケートが多数、戻ってくることを期待しています。 編集委員長

関西菌類談話会会報 No. 8

1990年11月15日 印刷

1990年11月15日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

事務局 〒618 大阪府三島郡島本町桜井台15-1

大阪府立島本高等学校内

電話 (呼) 075-962-3265

振替 大阪 5-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒618 京都市上京区下立売通小川東入る